

乙女高原が好き！1004号

乙女高原が日本山岳遺産に認定されました

2010年11月3日、甲府市の甲府商工会議所のホールで「第1回日本山岳遺産サミット」が行われ(主催 日本山岳遺産基金・山と溪谷社)、その席で日本山岳遺産認定発表がありました。乙女高原は他の3箇所とともに、記念すべき第1次の日本山岳遺産として認定されました。

日本山岳遺産は山と溪谷社が80周年を記念して山もしくは山岳エリアとそこで活動している団体をセットで認定し、そこでの環境保全や環境教育をサポートしていこうというものです。

詳しくは『山と溪谷』2010年8月号(山岳遺産の趣旨が詳しく載っています)、2011年2月号(乙女高原の草刈りボランティアの記事が載っています)あるいはウェブサイトをご覧ください。



今年も雨は降りませんでした(雨が降らないで11年!!)

11回目の草刈りボランティア

前日は一日中かなり強い雨でした。当日、ぼくは5時に起きて、林道をふさいだ木(強い雨で倒れた?)をどけたり、トイレのチェックをしながら、6時ごろ乙女に着きました。その間、ずっと雨。深い霧。天気予報は回復すると言っているし、雨は急速に小降りになっていたのだから「大丈夫、できる」と判断し、県の事務局の川島さんと準備を始めました。

「今年は天気がこんななので、参加者は少ないかな。現に、悪天候のため参加を見合わせる団体も出てきているし」と心配しましたが、結局、今年も200人を越える参加者が乙女の草原を守るために集まってくれました(204人)。それに、「あいにく」が「雨」のまから言葉みたいで、雨というイベントのかたき役のように言われていますが、悪いことばかりではありません。

もし、夜の早い時間に雨が止んで、天候が回復していたら、放射冷却により朝方冷えこみ、道路が凍結していたかもしれません。実はファンクラブ代表世話人の古屋さんは、道が凍っていないか心配で、前日の夜10時ごろ焼山峠まで下見に行ってくださったんですよ。朝まで雨だったので、かえって凍結の心配がなかったわけです。

手刈りの皆さんは濡れた草をつかまなくてはならなかったのだから、大変だったと思います。草を運ぶのも濡れた分だけ重さが加わりますから大変です。一方で、機械刈





りでは、草に水気があった方が刈りやすいし、湿っていたため、ほこりが立たず、アレルギーをお持ちの方からは「今年は思いのほか楽でした」との感想をいただきました。

林道の落ち葉を集めてブナじいさんの根元に敷くキッズプログラムも、落ち葉が濡れているので風に飛ばされることなく、林道にたくさん積もっていたので、短時間にいっぱい集めることができました。ちりとりを30個も用意したので、落ち葉を集めたり、袋に入れたりするのに、手を冷たくすることはありませんでした。

さて、もう11回目の草刈りです。流れは例年通り。開会行事のあと、班ごとの打ち合わせをして、作業に入りました。子どもたちには去年に引き続き「ブナじいさんに落ち葉のふとん」プログラムを用意しました。12時までには作業をし、恒例の温かいトン汁とお茶をふるまいました。トン汁には長蛇の列ができました。完売（売ってはいませんが・・・）でした。

お昼を食べたら、これも恒例の記念写真。この写真が来年の草刈りチラシに使われます。各班の作業内容を発表してもらって「分かち合い」、そして、閉会行事。

今年も重篤な事故や病人はなく、無事に終わらせることができました。終了後、ロッジを会場に、有志でお茶会をしました。

さて、今年の新機軸は、刈った草の活用です。林道脇の斜面が崩落し、草がまばらにしかはえてない所があるので、そこまで草を運んで入れました。乙女高原の草のたねを供給し、そこを乙女高原のような草原にしようという実験です。じつは去年も試みたのですが、運んだ草をことごとく誰かに運び去られてしまいました。そこで、今年は「この草は持って行かないで」という看板を立てました。今後、どうなるか楽しみです。

いちいちお名前は挙げませんが、山梨市・山梨県・乙女高原ファンクラブのたくさんのスタッフの皆さんがいたからこそ無事終わらせることができました。また、多くの団体の皆様のご参加も心強かったです。企業の社会貢献の機会としてもご利用いただけるとありがたいです。



田丸グリーン基金さんより

今年も活動協力費をいただく

草刈りの開会行事のあと、少し時間をいただいて、田丸グリーン基金さんからの活動協力費贈呈式を行いました。田丸グリーン基金さんから活動協力費をいただくのはこれで7回（年）目になります。そればかりでなく、毎年、春の遊歩道づくりや秋の草刈りボランティアには、たくさんの社員の皆さんが参加して下さいます。ありがとうございます。



シカをテーマに3年目。「シカ・人・乙女高原の今と未来」 高槻成紀さんをお迎えした第10回乙女高原フォーラム

2月6日、穏やかな日曜日。午前11時にスタッフが集合し準備。そして午後1時、フォーラムがスタートしました。司会は山梨市観光課の藤原さん。山梨市長の竹越さんと峡東林務環境事務所長の杉山さんからご挨拶をいただいた後に植原がマイクを引き継ぎ、パート1として乙女高原ファンクラブの取り組み報告をファンクラブ世話人の三枝さんから、シカ柵設置の中間報告を同じくファンクラブ世話人の竹居さんからそれぞれしてもらいました。パート2は県内でシカ問題に取り組む3地域からの報告をいただきました。榊山から広瀬さん、八ヶ岳南麓から吉柳さん、三窪高原から志村さんと雨宮さんです。パート3として、今回のゲスト高槻さんのお話をたっぷりお聞きしました。講師紹介をファンクラブ世話人の芳賀さんにさせていただきました。そしてフロアからの質問に答えたり意見交換したりする時間を取り、最後にファンクラブ代表世話人の坂田さんがお礼のあいさつをし、フォーラムが閉幕しました。片づけが終わった後は、ファンクラブ恒例の茶話会。茶話会に残ってくださった方が30名もいらっしゃったので、お一人一人から一言を聞く時間は取らず、おしゃべりする時間としました。



竹越山梨市長のあいさつ

スタッフの皆さん、講師・報告者の皆さん、参加してくださった皆さん、ほんとうにありがとうございました。ここで学んだことを糧に、乙女高原の自然を守っていきましょう。(以下、文責 植原)

榊山から（南アルプス市みどりしぜん課 広瀬和弘さん）

地元の巨摩高自然科学部による1981年の調査によるとアヤマメ平、裸山の総数で株数約2,900万本というアヤマメ大群落があったのだが、当時から開花数の減少が指摘されていた。2007年にはほとんど咲かなくなってしまい、アヤマメ祭りも中止せざるをえなくなった。そこで、同年、南アルプス市榊山アヤマメ保全対策調査検討会を設置し、アヤマメの状況を調査して原因を特定し、対策を考えることにした。そして、当時話題になったニホンジカの「食害」から守ればアヤマメはどうなるか…まずはネットを張ってシカという要因を除去し、ネット内外にコドラートを設置し、植物の生育に違いが出るのかを観察することにした。ネットの内外では植物の生育に非常に大きな違いが出た。また、無人のカメラを設置したところ、シカが草を食べている様子が写っていた。



榊山でのコドラート調査

2009年、ネットの中ではテガタドリが復活した。2010年には四十数株のアヤマメが復活開花した。

今後の課題として次のようなことが考えられる。 ネットは果たして永久に設置するのか ネット資材の有効活用(登山道整備や再利用) 大規模ネットには定期的メンテナンスが必要だが過大なコスト、負担 大規模にネットを設置すると野生動物の移動に影響が生じる 他地域への被害拡大 榊山の資産の再評価が必要 草原維持のための人為的な作業とモニタリング 野生動物の適正頭数管理(モニタリング)

八ヶ岳南麓から（八ヶ岳自然クラブ シカ・グループ代表 吉柳俊孝さん）

八ヶ岳南麓でシカ調査を行うきっかけは2000年のシカ観察会だった。定期的な調査は2002年から八ヶ岳南麓におけるシカの生息状況を調べるために行っている。

調査地は標高約1,200メートル。面積は約1km²。ほとんどは県営牧場の放牧地と採草地。調査ルートは往復4.5キロメートル。高原道路を自家用車で走りながらサーチライトでシカの姿を探し、観察する。見られた場所と頭数を記録している。毎年、12月から翌年3月まで、おおむね月3回調査を行っている。

調査結果から、シカは増えている ひとつの群の頭数も増えている（群が大きくなっている） 12・1月には特に多く出現する...ことが分かった。

シカが増えることによって、幼樹の食害、樹皮はがし、牧草の減少、庭や菜園の食害、鉄道の運転障害、自動車との衝突...といった問題が生じている。

今後の課題として 調査結果の検証 ハヶ岳自然クラブ内の他グループとのデータ交流 夏季の調査...の3つがある。

三窪高原から（甲州市観光協会会長 志村 功さん,甲州市観光交流課 雨宮洋太さん）

三窪高原は1972年「三窪のレンゲツツジ及び生息地」として県の自然記念物に指定された。レンゲツツジ以外の草花の宝庫でもある。歩道やトイレの整備を行政が行っている。

レンゲツツジの減少に危機感を持ち、2003年に実態調査を行った。2005年にはシカによる食害を確認した。2004～05年にかけて奥多摩の多摩川水系から分水嶺を越えて富士川水系にシカが爆発的に拡大したと理解している。三窪高原ツツジ祭りを開催していたが、2006年の三窪高原ウォークを最後に休会した。

2007年よりシカ柵を設置し始め、2009年までに9カ所設置した。鉄パイプ・鉄鋼による柵、鉄パイプ・忌避剤混入ネットによる柵、樹脂皮膜鋼管・忌避剤ネットによる柵と、様々なタイプの柵を設置した。それぞれメリット・デメリットがある。

2010年にはシカ柵内でレンゲツツジの実生を確認した場所にポールを建てた。計100本になった。実生が他の草の陰になったところもあったので、実験的に草刈りをしてみた。草刈りしない、草刈りして草を持ち出す、草刈りして草を放置するという3つの実験区画を作った。今年の春以降に実験の経過を観察したい。

今後の課題として 広域連携（国、東京都水道局、県、多摩川源流協議会、多摩川源流研究所、大菩薩観光協会、甲州市観光協会、大学、その他同じような悩みを抱える団体等） 調査（生態調査、GPS） イベントの開催（植樹イベント）等がある。



三窪高原のシカ柵

高槻成紀さんのお話 ダイジェスト シカが植物群落におよぼす影響：草原への影響は複雑

プロローグ

わたしにシカ問題解決の処方箋を期待しておられるとしたら、それはダメです。シカについて教科書的な勉強をしてノートにいっぱい取って帰ろうと思っても、それも期待に沿うことはできません。

わたしのお話で、この問題はとても難しいということを理解し、どう難しいか、それを考えるきっかけにできればいいかなと思います。

シカはどういう生き物か

岩手県のメスジカは80パーセントくらいが妊娠します。1歳の秋からほぼ毎年妊娠します。シカは恐ろしい勢いで増える潜在力を持った生き物といえます。

わたしは宮城県の金華山という島のシカを観察しています。

シカは体重の変動がとても大きな動物で、夏になると冬の50パーセント増しくらいになります。秋に体重はピークになって交尾期を迎えます。立派な角を持ったオスになるとエサも食べないで体重を2キロくらい減らして、メスの尻を追っかけまわし、痩せて、冬を迎えることになります。

角は毎年春になると生えてきて、翌年の春に落ちてしまいます。毎年のことですから、角への栄養補給もたいへんです。8月末から9月くらいにかけ、角は完成します。この時期までの



今回のゲスト高槻成紀さん

角は袋角といって、角に血が通っています。そして、その時期になると、血が通っていた袋の部分がはがれ、シカが角を地面に打ちつけたり、小枝に叩きつけたりして磨きをかけて、立派な角にして、複数のメスを確保して種付けをします。シカは一夫多妻制の社会を持っています。

11月からは、草や木が枯れてしまうので、落ち葉や枯れ葉も食べます。カモシカは食べるものが限定的ですが、シカは植物なら何でも食べるというくらい、食べる植物の幅が広い動物です。

金華山の場合、面積が限られていて、狩猟も行われていないために、毎年、生まれてきた数の分が減らないと、たいへんなこととなります。毎年3月に調査に行きますが、毎年相当数の死体が回収されます。今、全国各地で死ぬ数より生まれる数の方が多いので、分布を拡大しているということです。

1984年に東北を大寒波が襲い、多くのシカが死にました。このとき、金華山のシカは半分くらいに減ったのですが、すぐにまた頭数が回復しました。その後、97年にも大量死が起きました。頭数を調査してみると、この島の環境収容力(その土地の生産力が支えうる頭数)は50~60頭/km²であることがわかりました。ちなみにシカの食害が顕在化するのは10頭/km²を上回り20頭/km²くらいであるといわれています。

このような長年の研究で分かったことは、その土地の生産が許す限り(環境収容力)シカは増える、そして、10年に一回くらいの頻度で大量死が起きて、それがすぐに回復するということでした。

わたしたちは金華山の一部で、150頭ほどのシカ全員の顔を覚え、名前を付けて、メスが産んだ子にも名前もつけて、20年ほど追跡調査しています。プライベートに立ち入った調査もしていて、お父さんもかなりわかっています。3月にはシカをネットに追い込んで捕まえ、身長体重などの身体測定をし、採血してDNAを調べています。

クマやサルやカモシカはお互いが距離を保ちながら生活するので、密度が高くなると分散するのですが、シカはそういうことのない動物で、高密度でも暮らしていけます。

シカはいろいろな植物を食べ、しかも、1日に食べる量は10キロにもなる、非常に大食漢な動物です。

このように、シカは高い繁殖力を持ち、高密度で生息し、食べ物の幅が広いので、植物へ影響が非常に大きいのが特徴です。シカがいるところではきれいな花をつけるタイプの花はどんどん少なくなり、ススキ、シバなどイネ科の再生力の強い植物に限定されてしまいます。

シカと植物

金華山のブナ林は異様な景観です。立派な木はあるけれど、若い木はありません。ふつうは芽を出したばかりの小さな木がたくさんあって、大きな木ほど少なくなるはずなのに、若い木がありません。シカがいることで若木がなくなり、森の跡継ぎがなくなってしまいます。

春になると強い風が吹いて、木が倒れることがあります。そうすると、ドミノ効果で木々が倒れ、そこにススキが入り込み、シカのエサが増え、シカにとっては好都合になります。

シカの生息地の中に柵を作ってみました。10年たったら、柵の中の様子がまったく変わりました。最初は低木種が多かったのですが、そのうちイヌシデとかクロマツ、ケヤキが生えてきました。いかにシカが植物たちに強い影響を与えるかがわかりました。「シカが林を食べてしまう」んです。

シカがいると植物は毎日毎日食べられてしまい、たいへんと思いますが、本当にそうでしょうか。

ササは常緑性ですから、ほかの植物が枯れてしまう秋から冬にかけて草食獣にとっては相対的に重要度が増します。ササの葉は硬くて、消化率は必ずしもよくないのですが、枯れ葉よりは栄養価が高いのでシカはよく食べます。

金華山でメギというトゲのある植物の中にア



高槻さんの紹介をする芳賀さん



ロビーで開催されていた「ようこそ乙女高原へ」展

ズマネザサが2メートルくらいの高さになっているのを見つけました。まわりにあるササは背が低くて芝程度なのに、そこだけ背が高いのです。シカに食べられないほうがいいのでしょうか。

そこでササの密度と背丈を調べてみました。シカに食べられているところは、たしかにササは低くなっていましたが、そのかわり密度は高く、反対にシカがいないところでは背は高くなりますが、密度は低く押さえられてしまいます。ですから、一定面積に生えているササの本数と長さを掛け合わせてみると（つまり、一定面積におけるササの総延長）、シカに食べられているところも、柵内も、シカのいないところも変わりはありませんでした。つまり、植物はシカに食べられっぱなしではなかったのです。植物はすごいです。食べられたら、横から芽を出す - - を繰り返してがんばっています。

それだけでなく、トゲが強力なアザミが出現したり、この島のサンショウはトゲが長くて鋭かったりします。トゲ以外にもイネ科植物ではケイ酸体というガラス質のものを体の中に持っていて、硬くなっています。これらは物理的に植物の体を守っているのも物理的防衛といえます。

一方、化学的防衛もあります。クリンソウなどサクラソウの仲間是有毒で、シカは一口も食べません。レモンエゴマにも特殊な臭いがあるので食べません。カリガネソウもハナヒリノキ、ワラビもそうです。

イラクサはトゲトゲがあるので物理的防衛もしますが、トゲトゲが注射針にもなっていて、これが刺さり注射液が動物の体内に入るとイライラする、痛くなるという化学的防衛もしています。

シカと植物の関係は、植物の個別にみると、シカが好きな植物は減って、シカが嫌いな植物は増えるということになります。ですが、実際の自然では、植物たちは群落を形成していて、太陽の光をめぐる熾烈な競争をしています。ですから、シカがある植物を食べてしまうと、いままで見られなかった植物が急に現れるということもあります。乙女高原でもこういったことが起きているはず。もっと時間がたつと、もともとあった植物が消えてしまうという事態も起こり得ます。こういうように、種を個別にみるのではなく、群落レベルでみることのほうがはるかに重要であると認識すべきです。

シカの密度によってどんなことが起きてくるかをざっと見てみると、岩手では10頭/km²で植物が盆栽のように小型になり、房総では植物の種数が減ってきます。もう少し密度が高くなると、樹皮はぎが見られたり、丹沢ではスダケが少なくなったり。ふつうはここまでなんですが、島だとこれ以上の高密度になることがあります。そこまでいくと、低木や草本がなくなったり、ブナ林の更新が進まなくなったり、シカの好まない植物が目立つようになってきます。

参考までに、小笠原に媒（なこうど）島という島がありますが、ここではヤギが増えてしまいました。シカに換算すると100頭/km²です。ここは亜熱帯の鬱蒼とした林だったのですが、こうなると大規模な土壌流失が起きて、さんごの海に赤茶色の土が流れ込んでいます。

じつは奥多摩でも土壌流失が起きています。でも、この密度は10頭/km²以下です。なんでこんなことが起きるのか調べてみました。シカのいるところでは林床の植物が減ってしまうし、枯れ葉も減っていました。奥多摩では夏でもシカが枯れ葉を食べていました。こんなところでは土砂が流れやすいことがわかりました。しかも、奥多摩は斜面の傾斜角が30度といった急斜面が多いので、なおさら土砂が崩れやすいということがわかりました。

そこで、わたしが学んだことは、シカ対策には一般論はないということです。地形条件、気象条件、歴史的な事、産業構造など場所ごとに違うのですから、それぞれの場所のシカと林がどんな条件にあるのかをちゃんと把握しないとイケないということです。

乙女高原で起きていることは？

植物たちはだんだん遷移をしていきます。自然保護というのは遷移を進めることです。日本のように高温多湿で、どんどん遷移が進んでいく環境にあっては、草原を保護するということは、遷移を進めないということです。遷移を進めることを自然保護だとすると、草原を保護することは常識的な自然保護とは逆のことをすることです。このことが乙女高原では行われてきたわけ。草刈りをするのは自然保護にさおさすことです。

人間と自然とはふつう対立的に考えられます。人が農業生産をするということは自然を破壊すること。それは間違いなことだけど、許されるべきことですね。生き物の能力を巧みに利用して自分たちの食べ物を作る - - これが農業ですから、そのことはいいだろう。

一方、シカは昔から日本列島にいて、人が日本列島に入ってくるのは昔から、日本の住人です。シカが増えて、きれいな花を食べることは被害といえるのかどうか。シカは草刈りと同じようなことをしています。

人間が草を刈るのはちょっとどうかなと思うけど、シカが草を食べることは当たり前でしょう。草食獣が生きるといえるのはそういうことです。

乙女高原は、森林でないことに価値があるわけですね。草原というのは林でないことを維持すること、つまり、植生遷移を阻止することです。シカがもし草刈りと同じように草原を維持しているとしたら、シカは

悪いことをしているのか。これはなかなかむずかしい問題です。

もう一つ皆さんに覚えておいていただきたいことは、自然保護の歴史を振り返ってみると、たとえばツキノワグマを守りましょう、パンダを守りましょうなど、種を守ることからスタートしていますが、20世紀の後半くらいから、生態系の機能を保全するという意識になってきているということです。

ボーティンさんは「細かいフィルターの自然保護（保全）と粗いフィルターの自然保護（保全）がある」と言っています。「細かいフィルター」とは、クマを守るとかアラビアオリックスを守るなど、ターゲットにする種をぴしっと決めることです。そして、その種を守るための対策を立てます。当然、別の種を守るためには別の対策を立てます。今日も話題になっていましたが、レンゲツツジを守る、そのための植生管理というのはあると思います。

一方、「粗いフィルター」とは、林全体を守るとか、スカンジナビア半島のここを守るとか、土地あるいは土地の生態系、あるいはその土地の生態系で起こっていること - - 山火事や伐採など - - を組み込んだ自然保護です。それはある特定の種を守るのとはあきらかに違うアプローチです。

乙女高原を守る活動は、そういう意味でいうと、粗いフィルター保全を経験的にやってきたいということなんです。そのなかで、「シカは悪者で排除すべき動物なのかどうか？」ということなんです。

わたしは乙女高原ファンクラブのホームページを見せていただき、いくつか印象に残ったことがあります。たとえば乙女高原にはチョウの写真が載っていました。アサギマダラはガガイモが食草です。キベリタテハはドロノキ、サカハチソウはコアカソ、クジャクチョウはカラハナソウといった具合に、ほとんどのチョウは明るい草原に生える草を幼虫が食べるわけです。植生遷移を阻止し、明るい草原を維持してきたことがこのような多様な昆虫類をはぐくんできたといえます。

わたしはもうかれこれ50年間動物や植物を眺めてきました。そして、最近思うことは、いろんな生き物がつながって生きていることの素晴らしさです。だから、ある特定の生き物を守るというのではなく、いろんなヤツがいろんな生き方をしている、それらをひっくるめて守るのが大事なんだと思っています。

その目で見たとときに、乙女高原での保全活動というのは、遷移阻止という通常の自然保護とは違う活動をしてきたわけです。また、もともと種の保全ではなく群落の保全、つまりは粗いフィルター保全をしてきたわけです。その上で、シカをどうするべきか考えなくてはなりません。

わたしはシカをゼロにすることがいいとは思いません。ただし、もともと多くあった草をシカが食べているとしたら、抑制しなければなりません。「いるかないか」ではなくて、悪影響がない程度にシカがいることを容認するのがいいと思います。

行政も含めて、乙女高原をどういう林と草原の姿で維持していくのか、そのビジョンがわかれば、どうすればいいか、その答えが出てくると思います。そのことなしに、「前に咲いていた花がなくなった、どうしよう」では解決が見えてこないと思います。

手をつけない自然だけに価値があるわけではありません。これまで行われてきた乙女高原での保全活動は素晴らしい歴史的な存在だと思っています。それを引き継ぎ、次の世代に伝えていくことが大事だと思っています。

富士ゼロックス端数倶楽部さんより寄付をいただきました

富士ゼロックス端数倶楽部は富士ゼロックスで働く人々や退職者によって構成されたボランティア団体です。会員は給料や賞与から、『端数』（100円未満の金額）に個人の自由意志による『口数』を拠出します。その拠出金を積み立て、会員が必要と考える「社会福祉」、「文化・教育」、「自然環境保護」、「国際支援」の4分野で、資金を有効に役立てているそうです。

寄付には、会社から同額（マッチング・ギフト）が上乘せされ、一人ひとりではささやかな金額でも、全体ではまとまった活動資金になり、社会のために大きく役立てることができているそうです。（以上、富士ゼロックスの端数倶楽部ホームページを参考にしました）

このたび、乙女高原ファンクラブが寄付先団体として選ばれ、端数倶楽部および富士ゼロックス株式会社より寄付金をいただきました。ありがとうございました。

2010年度定期総会・座談会 3月13日(日) 午後2時

世話人の入れ換えもある大切な会です。ぜひおいでください。同封の出欠ハガキの投函をお忘れなく！

乙女高原ファンクラブの事務局だよ

乙女高原グリーンロッジ再開を求める要望書を山梨市牧丘町西保地区区長会長,同中牧地区区長会長,同諏訪地区区長会長,山梨市立牧丘第一小学校PTA会長,同牧丘第二小学校PTA会長,同牧丘第三小学校PTA会長,同笛川中学校PTA会長,山梨市牧丘町地区育成会連絡協議会長,乙女高原ファンクラブ代表世話人の連名で山梨市長・教育長に提出し,2010年11月25日,話し合いの場を持ちましたが, ロッジ再開までの道のりはまだまだ遠そうです。いっそうのご協力をお願いします。

3月13日の総会后,恒例の座談会が行われます。今回の話題提供者は乙女高原で昆虫相調査を行ってらっしゃる**槐(えんじゅ)真史**さんです。お話のタイトルは「虫の目から見た乙女高原の過去と今～昆虫相調査の中間報告～」です。お楽しみに。

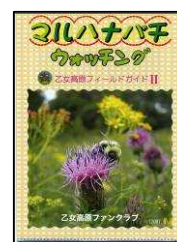


乙女高原案内人

乙女高原ファンクラブの刊行物

乙女高原インタープリテーションのテキスト『乙女高原案内人 誕生と成長の記録』(A4判186ページ)乙女高原案内人養成講座の中身と,その後の案内人の活動の様子を一冊の本にしました。希望者には実費でお分けします。1冊1000円,送料は一冊につき80円。欲しい方は郵便振込で一冊につき1080円分を送金してください。

マルハナバチの観察と調査のおともに『マルハナバチ ウォッチング』(A3判両面カラー)マルハナバチの生態,ファンクラブで行っている調査,乙女高原のマルハナバチの見分け方をコンパクトにまとめました。欲しい方は事務局までご連絡ください。



春から夏にかけて咲く草花のガイド『乙女高原のお花たち』(A3判両面カラー)乙女高原フィールドガイドの第1号。春から秋にかけて咲く47種類の草花を写真つきでコンパクトに紹介。草丈の表示や草花を一言で表したコメントが「分かりやすい」と評判です。今年リニューアルしました。欲しい方は事務局までご連絡ください。



乙女高原ファンクラブの普通会员になりませんか？

乙女高原ファンクラブの会員には普通会员とサポーター会員の2種類があります。会報(ニュースレター)は年4回発行予定です。4月は全会員に送っていますが,あとの3号は普通会员にしか送りません。乙女高原での活動を多くの方に知ってもらいたいので,できるだけ普通会员での入会をお勧めください。また,現時点でサポーター会員の方も普通会员への移行をお勧めします。会員が増えることで,乙女高原を守るファンクラブの発言力も強くなります。

乙女高原ファンクラブに入会するには・・・

- ・「入会します 氏名・郵便番号・住所・電話番号」と,入会のご意志を事務局まで届けてください。だされば,いつでも,だれでも会員になれます。ファックス,メール,手紙が確実です。
- ・入会金も年会費もありません。
- ・普通会员には年4回,サポーター会員には年1回,ニュースレターが届きます。
- ・普通会员には総会出席の義務がありますが(委任状可),サポーター会員にはありません。
- ・そして・・・,乙女高原を守る力が1人分,大きくなります。

乙女高原ファンクラブへの連絡先

【事務局】植原 彰(方) 〒404-0013 山梨県山梨市牧丘町窪平 1110-3
TEL/FAX 0553-35-3682 電子メール otomefc@fruits.jp
会報への原稿や写真等の投稿もこちらにお送りください。
WEB <http://fruits.jp/~otomefc/>

郵便振込 (番号)00220-8-71093(加入者名)乙女高原ファンクラブ